

# 科学に社会的・文化的バイアスを見つけること

網谷祐一 (Yuichi Amitani)

会津大学

フェミニスト科学哲学は科学的仮説の中に様々なバイアスを見だし、それが科学を非生産的な方向に導いてきたと論じてきた。例えばサラ・ハーディ (Hrdy 1986) は、1970年代末までの霊長類学では、交配において霊長類のメス個体が積極的な役割を果たすという観察 (例えば自らアプローチして複数のパートナーと交配すること) に注意が払われてこなかったこと、そして当該分野において女性研究者の数が増えてきた70年代末以降はこうした事柄が議論の対象になってきたことを指摘して、こうした変化が生じたのはそれ以前の研究者が「交配時のアプローチに積極的なのはオスだ」というヴィクトリア朝的な背景的信念をもっていたからではないかと推察している。

この意味ではフェミニスト科学哲学の研究は生物学などの分野の認識的進歩に貢献してきたと言える。しかしこのことは科学的仮説の中にバイアスのような価値負荷的な要素を見出す試みが常に成功することを意味するものではない。本発表では、進化心理学の仮説——とくにヒト女性のオーガズムについての進化的研究——の例を用いて、なぜしばしば科学的仮説の中に価値負荷的な要素を整合的に見出すのが難しいのか議論する。

ヒト女性のオーガズムについての進化的研究には、主に二つの仮説がある。一つはヒト女性のオーガズムは適応であるという仮説 (適応説) であり、もう一つは女性のオーガズムはそれ自体では適応ではなく、ヒト男性のオーガズムが適応的であることの副産物として存在するという説 (副産物説) である。ここで興味深いのは、この二つの仮説それぞれについて、仮説が男性中心主義的バイアスにとらわれていると主張するフェミニスト科学哲学者がいることである。

まず適応説については、それを支持する具体的な仮説を形成する過程で研究者が男性中心主義的バイアスに影響されることがあることが指摘されている (Lloyd 2009)。例えば、オーガズムを経験した女性が性交後横たわりやすくなることによって、精子が女性器より流出するのを妨げるというデズモンド・モリスの説 (Morris 1967) には、女性のオーガズムの様態を男性のそれから理解しているという批判がある。一方副産物説にはこれは女性のオーガズムを男性のオーガズムの進化的「つけたし」に過ぎなくさせ、その意義を失わせるという批判がある (Fausto-Sterling 2000)。

本発表では両仮説についてのバイアスの指摘の源泉を分析しつつ、価値負荷的要素を発見することの意義に対する懐疑——価値負荷的な要素を見いだすだけでは当該分野の認識的進歩に貢献することにはつながらないのではないか——について議論する。

## References

- Fausto-Sterling, A. Beyond Difference: Feminism and Evolutionary Psychology. In: Rose H, Rose S, editors. *Alas, Poor Darwin: Arguments Against Evolutionary Psychology*. Vintage; 2000. p. 174-189
- Hrdy, Sarah Blaffer. Empathy, polyandry, and the myth of the coy female. In: Kourany JA, editors. *Feminist Approaches to Science*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.; 1986. p. 119-146
- Lloyd, EA: *The Case of the Female Orgasm: Bias in the Science of Evolution*. Harvard University Press, 2009
- Morris, Desmond: *The Naked Ape: A Zoologist's Study of the Human Animal*. Random House, 1967